

【資料2】

総合科学技術・イノベーション会議
教育・人材育成ワーキング・グループ(第6回)
2022/2/9

中間まとめに対するアンケート結果について(概要)

「Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージの中間まとめ」に
寄せられた国民の皆様からの御意見



令和4年2月9日

内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局

1. アンケート実施概要

・実施内容:

「Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」の策定に向け、広く御意見を募集。

・募集期間

2021年12月24日(金)～2022年1月16日(日)

・実施方法

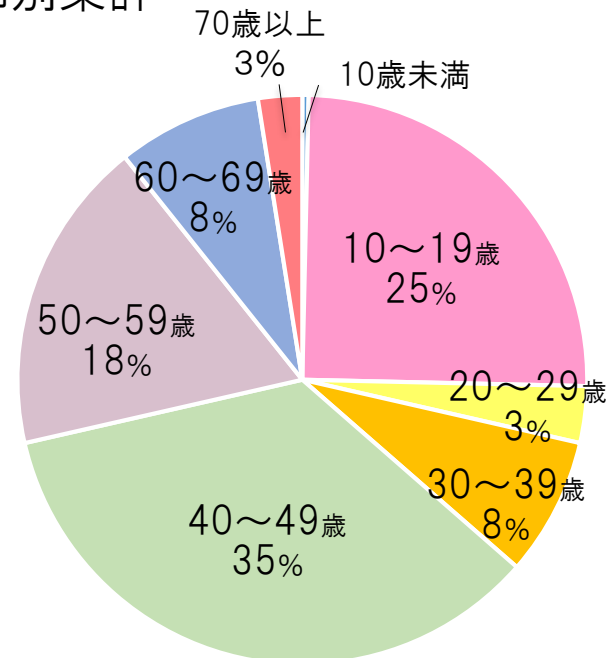
内閣府のホームページに「Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージの中間まとめ」に対する意見募集について、アンケートフォームリンクを掲載し、自由記述にて回答を受付。

2. 結果概要

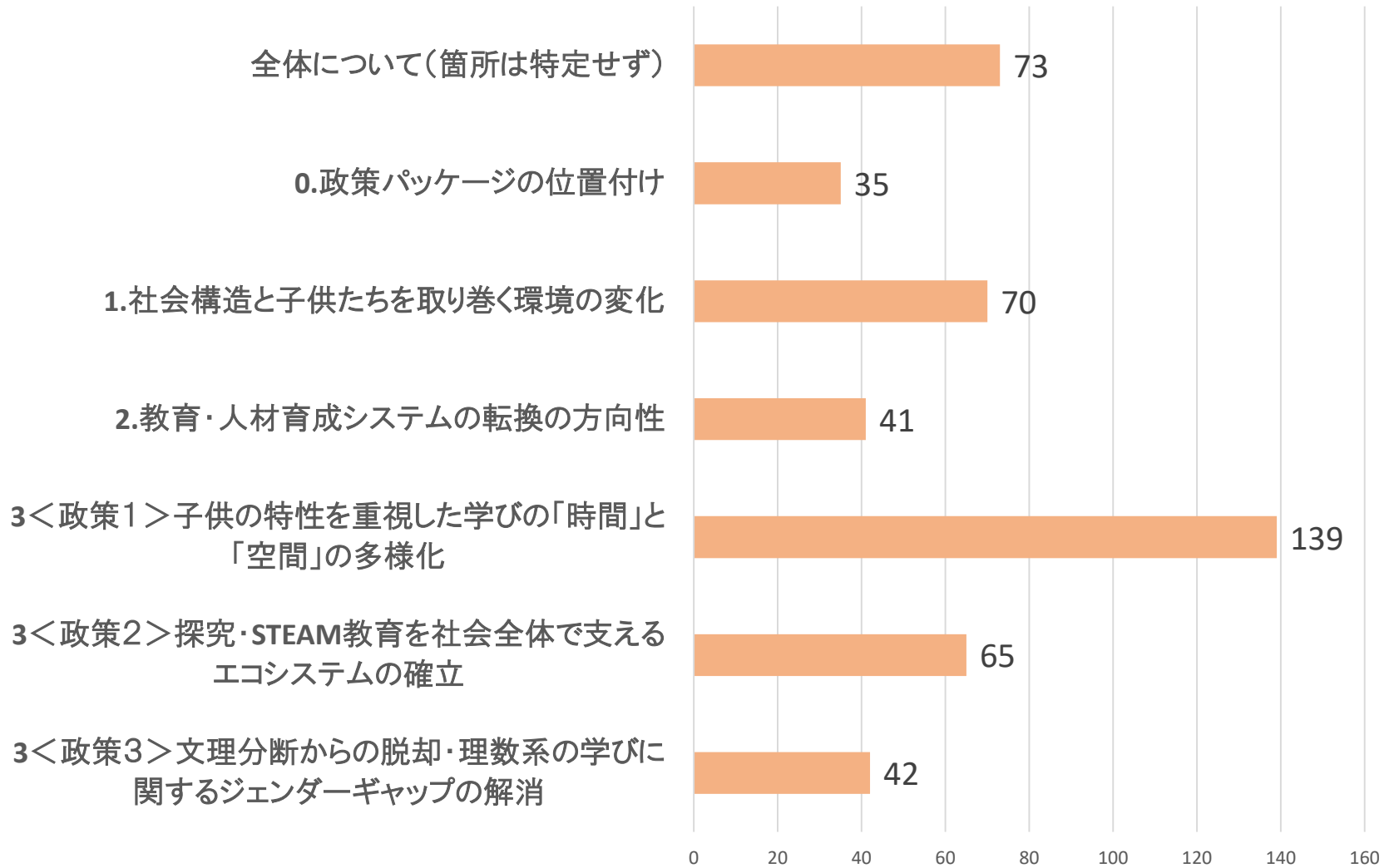
(1) 総意見数：465件

(意見1件あたりの平均文字数:446字)

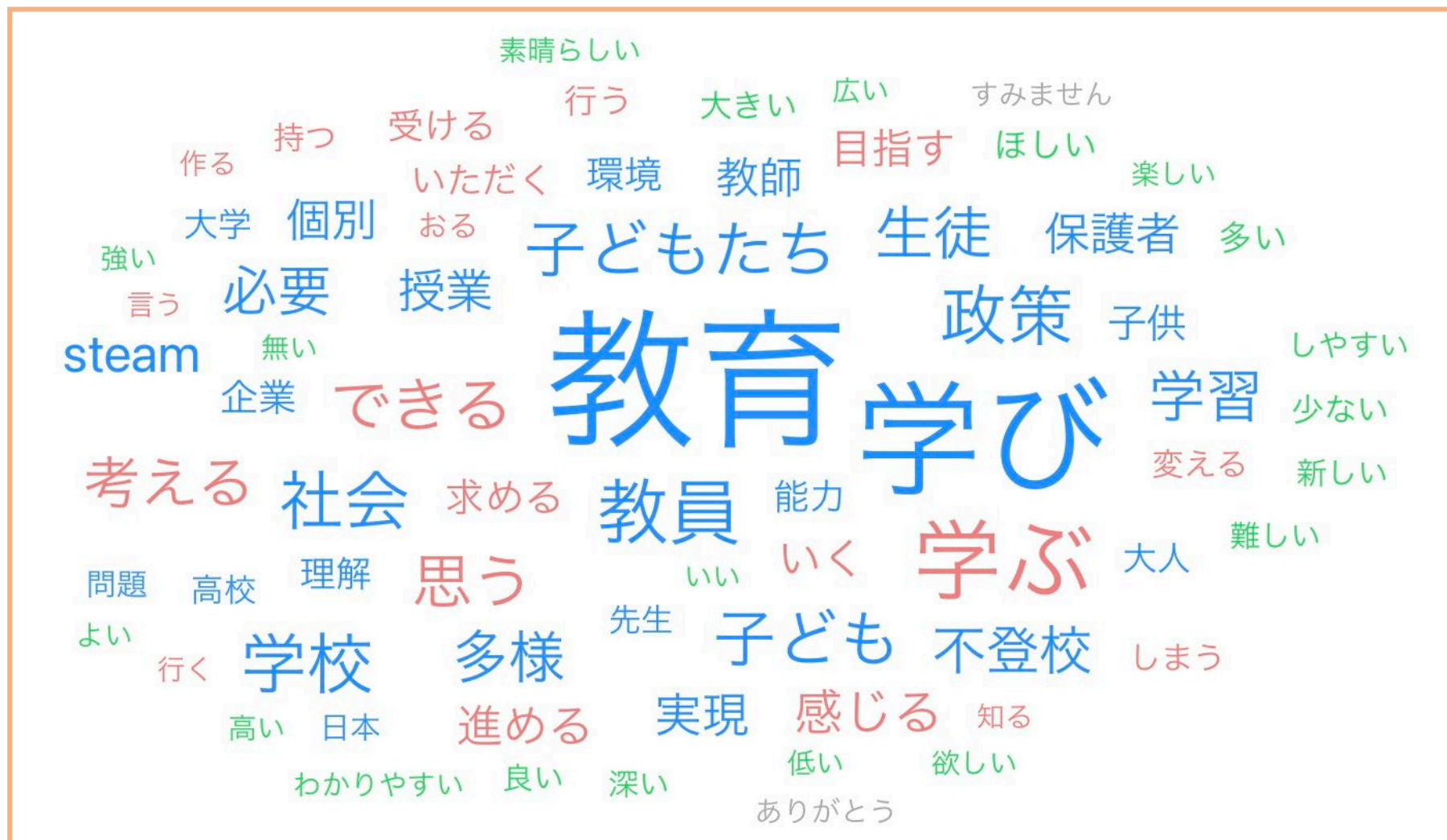
(2) 年齢別集計



(3)項目別集計



(4) テキストマイニングの結果



青・・・名詞

赤・・・動詞

緑・・・形容詞

灰・・・感動詞

3. 主な御意見

10代の御意見

※最低限の誤字脱字の補正は行ったが、基本的には原文に近い形で抜粋・掲載

①個別最適な学びと子供の選択肢の拡大について

(個別最適な学びは必要、でもサポートが必要)

- 僕はもう小学校四年生です。今の学校で皆一斉に同じ事を同じようにする事を求められるのが苦痛です。一刻も早く変わって欲しいです。いきなり全部変わるのは無理でも、ほんの少しでも新しい要素が入れば毎日をもっと楽しくなると思います。そして、六年生にはこの政策で変わった授業を受けてみたいです!
- 今後、教室、クラスのあり方やスタイルは多様化していくべきだと思います。オンラインもオフラインも違う意味で得るものがありました。学びのスタイルを自分自身でデザインしていくのが当たり前の、ある意味オールオッケーなクラスができてほしいです!!
- これまでの同一的な教育から個人の成長を重視した教育への方向転換は、時代的に必要不可欠なものだと思う。しかし、多様性重視の教育を採用している学校の話を知っていると、生徒の評価が難しかったり、自由であるが故に特定の知識が欠落しているという場合もある。このことから、完全な多様性重視の教育は今の段階だと厳しいように感じた。
- 子供の能力によって勉強の段階を分け主体的に学ばせるのはいいと思いました。疑問としては主体的に学べる子供がどれくらいいるのかということです。主体的に学ぶ力をつけることは将来に

も役立つので良いことだと思いますが、高校生でも高2までの目標は勉強する習慣を身につけることと主体的に学ぶ能力を求められているので、小学生でそれができるのかという疑問があります。また能力によって勉強内容が変わるところですが、それによってクラス内いじめなどが起こりやすくなるのではないのかなと思います。そして能力差によって焦ったり自己嫌悪に陥ったりする子がでてこないのかなあと思います。差を是正することもあると思いますが一歩間違えれば能力差を大きく開くことになると思います。

- 「個別最適な学び」について少し疑問があります。「個別最適な学び」にとって重要なのは「自分で自分の学びの目的やペースを自分で試行錯誤しながら見定めること」とありますが、実際には生徒がこのような試行錯誤を行なっていくことは難しいと思います。自分は高校生ですが、そのような試行錯誤を急にやってくれと言われても何も思いつかないし、他にもこのような状況の高校生は多数いると思います。従って、大人たちが生徒たちに試行錯誤の方法を教える機会が必要だと考えます。他にも、この政策中にある循環を作ることだったり、従来の仕組みからの変化に対応することだったりを行うときに誰しもが柔軟に対応できるわけがないと思います。現在の高校生の思考と政策が掲げる理想には大きなギャップがあると思うので、そこを埋めるようなサポートが必要になってくると思います。

①個別最適な学びと子供の選択肢の拡大について

(自分のペースで自由にやると限界突破できない)

- 子供のペースで勉強することも重要だが、それは自分の限界を一時的な疲労や感情で決めてしまい限界突破がしにくくなるリスクをはらむ。子供のうちは半強制的に何かに打ち込ませることで当人が思っている以上の力を出せることがある。実際の経験として、私は理系科目が苦手なものの物理の先生の指導をもとに一般相対論の概要や物理に関する高度な数学を理解できたことがあるからだ。ゆえに、単に子供のペースに合わせるよりも限界の一步先の指導を行い、子供の伸びしろを最大限にのばすためのサポートをがっちり行う体制の確立を望む。

(「自由」というプレッシャーもある)

- 個人の選択を尊重されることが、選択を迫れるプレッシャーとなってしまうのか。選択できなかった場合の体験コース(救済処置)は設置できないか。多様性を重視するあまり、相手を理解できない(どうしても嫌悪感を感じてしまう)ものがついていけなくなるのではないか。多様性を重視し、個人の選択を尊重する教育環境を整備した際の配慮はできているのか。
- 子どもたちの自由を大事にして伸ばそうとしていることはとても伝わりました。ただ、自由を求められたり、自分の個性を生かしたり、他の人と違うことをやったりすることを強制させられるのは苦しいと思う人もいるのではないかなと思います。自分の個性を見つけ出

してそれを活かすために何か実践しないといけないという社会になるのは辛いんじゃないかなと思います。特に、精神的に不安定である中高生という時期にさらに不安や葛藤、周りと比べたときの劣等感に悩まされるようなこういった状況で生活するのは危険じゃないかなと思います。

②学校に集まり多様な人と触れ合う学びの重要性について

- P.11などでオンラインを活用した教育の場というような話が多く上がっているが、被教育者目線としては対面の授業の場を貴重な機会として大事にしてほしいと思った。オンライン授業の経験を通し、やはり対面で授業を受けて議論し合う機会は必要だと感じた。オンライン上では議論することはできても、何か熱の入った議論がしにくいと思う。だからこそ、デジタルの力を適材適所利用しつつも、対面の機会を活用するシステムの構築をお願いしたい。
- 認識すべき教室の中にある多様性・子供目線の重要性について、一つの教室にクラス全員が集まって授業を受ける意味は、今コロナ禍においても言えることだと思っています。一昨年から先が見えない中でも模索しながら進んできたことで、オンラインの環境もコロナ前では想像できなかったほど整ってきたと思っています。それでも、やっぱり対面で皆が集まる学校に戻そうとする意味。それを最大にしていくことが大事だと思います。色んな人の色んな意見、個性、特徴、顔色、すべてを肌で感じる環境だからこそ、大変なこともあるけど集団としての成長や得るものの大きさはやはり何にも変えられないなと去年感じました。

②学校に集まり多様な人と触れ合う学びの重要性について

- 学校は社会人になる前段階の小さな社会であり、そこで社会性や協調性を学ぶことに重要な意味があると思う。自分の学力や興味にあった学びを各々がアプリケーションで行ったり、学年を越えて一緒に学ぶことができたりするのも素敵なことであると思うけれど、必ずしもそれがいいとは限らないと思う。学校は、学級という集団の中で、対話や協働を重視し、人間的な学びができることに意味があると感じる。私自身は、小学校や中学校では自分の学力や能力を高めることよりも、色々な人と関わって社会を勉強するという意味で非常に学びがあった。なので従来のように、同年齢の友達と同じ教室で一緒に勉強して、学校生活を行うことも大切だと思う。
- 社会の縮図と言われる学校では多様な子どもがいて、個別最適な学びへと移り変わっていると思うのですが、私はどこかで同じ学年、クラスの人と同時に同じことを学ぶ機会はなくさないでほしいと思います。共に学ぶ人がいるというのは学生の武器であり、一番子どもたちに影響を与えるのが同じ学年、クラスの人だと私は考えています。なぜ学校に行くのかを考えたときに一つの教室の中で共に学ぶ人がいるから学校に行くのだと私は思いました。もちろん子ども一人一人の特性や能力をつぶさないことも大切ですが、共に学び意見や考えを交流できる人が自分のすぐ近くにいること

の方がより深い学びになるのではないかと考えています。個別最適の学びばかりしてしまって他人の考えややり方を受け入れることが出来ない、拒否してしまうようなことが起きることは子どもが将来生きていく上でとても苦勞すると思います。また、他人と交流することでしか気づけない価値観もあると思います。デジタルな社会のなかでもアナログなつながりを忘れないでほしいと思います。

- これはコロナ禍という状況に置かれて改めて気づいたことでもありますが、「学校」という子供たちが集まって学び合う場は無くしてはならないと思います。学校というひとつの擬似的な小さな社会の中に身を置くことで他の人と意見を交わしたり喧嘩したり、仲良くしたりする協調性や社会性を身につけることは非常に大事だと考えます。(これは私の体験なのですが)私は中学に入った頃は非常に自己中心的な性格で周りからも敬遠されていたのですが、中学で生活した時に周りの事を考える、ということ学びました。なにより友達と過ごすだけでなく年間行事などで思い出を残すことは今後人生において辛い時の支えになることもあり非常に大切だと思います。更にみんなで集まって勉強することで自分のわからないことを子供たちの感覚で話し合うことで理解しやすくなったり、他の人の疑問を聞くことで更に深い理解を得られることもあります。教育に重きを置くことも大切ですが、「学校に行くこと」それ自体にも意味はあると思います。

②学校に集まり多様な人と触れ合う学びの重要性について

- 一斉授業の限界が指摘されている。文を読んでいると、学習内容を生徒一人一人のレベルに合ったものに最適化していくことが目標のように見えた。しかし、これでは学校で授業を行う意味がなくなってしまうと思う。大勢が一つの教室に集まって授業をする目的はその科目を学ぶ以外に違う出自の人の価値観、視点を実感し、それを自分の人生にも生かしていくことだと思う。せつかくそれぞれ違う長所を持ったもの同士が集まっているので、それを各々で伸ばそうとするのではなく、全体で共有することによって全体としてより新たな視点から物事を見るのが可能となる。これにおいて必要となることは教師がどうするかということではない。授業を構成するのは生徒であり、生徒が授業を進めていくという感覚を持たせることが必要だ。教師一人が授業の全てを決めてしまうと、自然とその教師の価値観を生徒に強要することになりかねない。しかし、生徒自体が授業を進めていくことによって、教師が気づかなかったことも生まれるだろうし、多様性を担保しながら互いに能力を伸ばし合うことが可能となる。この中で、教師は授業が過度に関係のないピックに集中しないかを監視し、時には方向性を修正するサポーターとしての役割を果たすべきである。

③「好き」や「夢中」を探すこと、見出すことについて

- 子供の『好き』や『夢中』を子供がアピールできる瞬間は一瞬で、大人(親・保育士など)が子供の『好き』や『夢中』を伸ばせる環境

を素早く作らなければ消え去る(見えにくく、見つかりにくくなる)と思います。私は小さな頃、この子は歌が好きなんだということを親が見抜いてくれたとともに、親も子供に音楽と触れてほしいという意思があって、プロの児童合唱団のオーディションを受けることができ、歌という『好き』を伸ばすことができました。なので、私は歌うことが得意であり、これだけは日本でトップレベルだと思うと胸を張って主張できるものがあります(まだまだですが)。ですが、自分のクラスでは、「自分はあなたみたいに特別できるものがない」「好きなものがわからない(無い)」という人がとても多く感じます。そういう人たちは大体中学校に入学したときから塾に行って大学受験に備えるなど、今までもこれからもガツガツ勉強をしている人に多い傾向があります。ガツガツ勉強をしている人が行くような進学校からこのような政策が進められるという印象がありますが、そういう場所で「君たちの『好き』を育ててあげよう」「どんなことに興味がある？」と問われても「私たちは勉強しかやってこなかったからそんなの知らないし...」とありがた迷惑になってしまいます。「特異な才能・能力を活かすことができるようにするため」とか以前に、才能・能力を見つけしてほしいんんです。先生や親が子供の才能・能力に気づいていないどころか本人も気づいていないケースがあります。これはクラスメイトという身近な友人という立場にいて、その人の才能にうつつすらと気づいたりするから“気づいていないこと”に気づけていますが、本当に世界中の誰も気づいていない才能・能力を持っている人はたくさんいると思います。本当にもったいないです。本人も、社会も。

③「好き」や「夢中」を探すこと、見出すことについて

- 目指すイメージ(2)に『特異な才能のある子供の「好き」や「夢中」を手放さない学びの実現』とあるがここに違和感を感じた。この政策は特異な才能がある子供には良いものだと思うが、まだその才能に気づけていない子供にはどうなのかと思った。今の状態のままこの政策が進むと、周囲の友達が才能を伸ばし、夢に向かって努力している状況に不安を覚え焦りを感じていけなくなって不登校になるということが起こってしまうのではないかと思った。このようにならないためにも私はまず教育の導入部分を変えるべきだと思う。導入部分でつまらないと感じたものはその後もずっとつまらないと感じる。その反対も同じである。導入部分でその子供が後にそれに対して抱く感情が大きく変わると思う。だから、導入部分を変えることが重要であると考えた。具体的には子供の日常生活に身近なものに関連付けて、もしくは子供が興味を持ちそうなことに関連付けていくとひかれやすいと思う。そうして子供の興味を引き付け才能に気づかせる、その次のステップとしてイメージ(2)の構造を進めると良いのではないかと思った。ただ、それでもまだ少し足りないと思った。もう一つその才能を伝えるというステップが必要だと思う。現代のグローバル社会では「伝える」という行為は当たり前求められるもの。その伝えるという行為を教育として全面的に進めていくようにしたらもっといいと思う。具体的には英語を

もっと実践的に学ばせるようにする、スライド資料をつくってプレゼンを生徒に行ってもらう、など。

(本物に触れる機会が欲しい)

- 「好き」や「夢中」を見つけるためには、様々なものに本気で触れてみることが大切だと思います。普通、小さな頃に触れていたものが年月を重ねていくうちに才能・能力が花開く場合がありますが、その「小さな頃」はもう終わっていて遅すぎる人が大多数です。小さな頃は様々なものに触れるだけでピンとくるかもしれませんが、ここまで育つと本気で触れない限りほぼ不可能だと私は考えます。学校などの取り組みで様々なものに触れる機会があってもサラッと触れる程度では何の意味もなく、「何か思っていたのと違った...」で終わります。長くなってしまいましたが、特定の分野において突出した意欲・能力を有する子供を最大限に生かすためには、様々なものに本気で触れる機会が必要です。本気で触れたいです。自分の才能を知りたい。私が高収入の未来のためだけの進路を決めて白黒の人生に進む前に、早く、社会を時代に追いつかせてください。なるべく早く。よろしくお願いします！

③「好き」や「夢中」を探ること、見出すことについて

(「社会に役立つ」と「好き」が両立しない)

- 生徒のやりたいことや興味について、文理分断からの脱却というところで、「理数を使う職に着きたくない」という記述があり、それについて思うことがありました。たとえやりたい事があっても、今は「社会に役立つこと」以外は敬遠されているように感じます。たとえば、(私の場合は)イラストを描くのが好きで、絵を描く仕事をしたい、とか、歌を歌うことが好きだから、絵を描くことと組み合わせてそのような活動をしてみたい、とか、人を笑わせることが好きだからお笑い芸人になってみたい！とかを考えたことがあります。どれも狭き門で、成功するのはひと握りで、成功しなければどん底人生、と言うようなイメージが強く実際そうであると思うので諦めて勉強の道に進んでいます。(ただ私は化学という好きな教科を見つけられたのでその道に進みたいと思っています)私が上記に書いたことの中には思いつきでやってみたい！と思ってやろうとしたこともあります。どれも言えることは、今社会で重要視されていて、所謂「成功する」人が多くリスクも少ない安定した仕事は、「どれだけ社会に役立つか」というものが非常に多く、それには全て「勉強」が必要であるということです。そのようになってしまうのも仕方ないですが、そもそも勉強、すなわち学問というのは(美術や芸術と同じように)学問であること、が大事であって、学問を社会に応用することは学問の本質ではないように感じます。学問の本質を学ぶ上で大事なものは好奇心と探究心で、

それを学問に対して向けることが出来ない子供たちは勉強に対する「やる気」がない子達であると思います。つまり何が言いたいかと言うと、子供が学問や勉強以外のことに興味を持った場合、その夢を諦めてしまう可能性が高いということです。そのために、なにか子供たちが夢を継続して追えるような環境を作ることも大事かなと思います。具体的でないし、もしかしたら政策パッケージの主要な部分では無いことかもしれないですが、ずっと思っていたことなので言わせていただきました。

④理数系の学びを専門性の高い教員から学ぶことについて

- 理数系に対する苦手意識は、そもそも勉強をすることへの「やらされ感」から来ていると思う。そもそもなぜ勉強をするのか、その教科を学ぶことの意味とは、その教科がどのように役に立っているのか、その教科の魅力とは、などを教えるといいと思う。例えば、私は、数学の幾何の分野で、「幾何の分野では、定義と公理を定め、定義、公理から定理を作り出すことによって、定義・公理の中では正しい世界ができる」と先生に教わって、とてもおもしろいと思った。分野に精通した専門性の高い教員によって、教科の魅力や一つ一つの問題の面白さなどを伝えていけば、その学問を学習することがとても面白くなると思う。また、学問の歴史や学問がどのような経緯でできたか、他の学問との繋がりや位置づけなども知るととてもおもしろいとおもう。
- 私の高校では専門性を持った教師が理系科目を教えています。そういった教師の方々がいる環境に移ったことで、今まで自分とは縁がないと思っていた理系という分野がより身近に、魅力的に感じるようになりました。専門性を持った教師が理系科目を担当するのは、理系科目への興味を持たせるのに、非常に効果的だと思います。

- 「目指す姿」のところに書いてある「産学双方からのロールモデルの発信・職業に関する情報不足の解消」というのはとても良いと思いました。自分は今進路を決める段階にきていますが、実際にどの学部に行くかどのような仕事や学問に行き着くのか、イメージしづらい部分が多々あります。このようなことが理系に進もうという人が少ない原因の一つだと自分も思います。これは理系に限った話ではなく、職業全般について言えることだと思います。どの職業はどのような楽しさがあるのか。これらの情報があまりに不足しているがために進路選択に困る高校生は多いと考えます。

⑤早期の文理選択について

- 中学卒業の段階では学問の深いところまで学ぶ機会がないのにも関わらず、文理選択をさせられることに違和感を感じた。大学段階で様々な分野を学んだ上で文理を選べるという選択肢があっても良いのではないかと思った。P.16で66%の学校がコース分けを実施していることを問題提起しているのだから、もっとこのことを取り上げて良いと思った。

⑤早期の文理選択について

- 現在の高校課程で高校生は文理選択、さらに科目選択が課されます。自分の将来像が十分に構築できていないままこれらの選択をすることは困難であり、たとえ将来像があっても他の可能性を探る機会がないまま後で後悔することは残念です。高校の授業を超えたより広い枠組みでの学びを得ることで、高校生一人一人が自身の関心に沿った進路を選択できるようにするのではないかと思います。
- 文理を隔てるのは学ぶ方面からみればとても効率的だが、それ故に一度選択したら再び選択しなおす機会が少ないと思う。一定期間に一度再び選択しなおすチャンスを与えたり、それぞれの分野が別の分野に対してアピールする機会を設けるべきだ。

⑥理数系の学びに関するジェンダーギャップについて

(ジェンダー問題は幼少期に決まる)

- 大体の人の考え方は小学校の教育で決まると私は考える。今回はジェンダー問題について着目しようと思う。例えば教室の座席表で男は青色、女は赤色など色で分けられているのが多いこれは小学校だけでなく中学、高校もだ。このような細かなことでもジェンダー問題につながっていくのではないか？このようなところも改善する必要があると私は思う。

- 資料を見ると、女の子は女の子らしくあるべきと考える保護者が非常に多いことが分かった。これは解消しなければならない課題であろう。それには、学校等で親にも考え方や子供の情操教育の方法などを教えることを義務付け、それに対するマニュアルなどを作成すれば良いのではないか。親の考え方というものは子の考え方にも大きな影響を及ぼすだろうから、次世代の考方を変えるためにはまず親世代の考え方に改革を起さねばならないだろう。
- 大人の考え方が子供に教育、発言として伝わることもあるのでジェンダーギャップ解消まではまだまだ時間がかかると思うので、より丁寧な対応が必要だと感じた。

⑥理数系の学びに関するジェンダーギャップについて

(ジェンダーギャップの解消に国が介入すべきでない)

- 私は文理における男女の比率の差をなくそうと国がわざわざ介入しようとしている現状に疑問を抱いている。なぜわざわざ文系、理系の枠組みでさえ男女平等にしなければならないのだ。最近の社会は平等平等とまるで「平等」というきれいな言葉を使う自分に酔いしれているかのようになんでも平等にしないと気がすまないのかという状況だと感じている。今回の私の疑問点もその一部だろうと思えるくらい私は納得がいていない。私自身性別は女性であるがそれにおいて文系の道しか与えられていないというわけでもなく、理系を選択したし、工学系はどうしても苦手で全く好きではない。ただ好きかどうかで私は文系か理系かを決めた。学校の友人に聞いても同じ理由で文系を選んでいる人もいれば理系を選んでいる人もいる。このような好きか嫌いかで文理を選択している人が多くいて、その結果が今の文理の男女比に現れているのだと私は思う。それなのにその人達を男女比があまりにも違うという理由で変えさせたいと思うのはあまりにも勝手だ。たかがその都合のために好きでもないことをやらなければならないのならそれ最悪な世界に違いない。このような事にならないように男女の数の平等よりも個人の意思の追求をしやすくなるような政策をするべきだと思う。

⑦大学や民間企業等との連携の必要性について

- 授業の中に自分の興味を探索するような授業があると良いと思う。それによって自分が興味のある分野に更に特化して意欲的に勉強することができるはずだ。例えばその分野の大学教授や企業が講演をしたり、どんなことが知れるのかを明確にしたり、そういうようなものがあるといいと思う。
- <目指すイメージ>で提案されていたエコシステムをぜひ、全国に広めていただき私たち学生にとって「当たり前」な教育の一環になってほしいと思いました。特に、「高校での探究・STEAMが実施可能な学校体制の構築」は実現するべきだと考えます。私自身、大学が主催の探究プログラムに参加して学問と社会への視野が大いに広がりました。中でも、研究を始める前に大学の講義を受けたことで高校の数学や物理の授業で学んでいる内容が実社会でどう応用されているのかを自ら知ることができ、より高校の授業を大事にする意義を感じるとともに、意欲的に学べるようになりました。こうした気づきに出会えると多くの高校生がよりポジティブに現実的な、進路を考えることができるようになると思います。

⑦大学や民間企業等との連携の必要性について

- 私の通っている学校は研究ができる環境が整っているが、そうではない学校が大半である。私は、もともと研究がしくてその学校に入ったのではないが、研究活動するに連れて、研究が好きになって、将来も科学者になりたいと考えている。しかし、そのような環境がいなければ、科学者になりたいと思わなかっただろうし、研究に興味があってもできない人は多いだろうと考えると、学校で研究するための環境が整えられなくても、研究をするために中高生全員が自由に使えるような場所があれば良いと思った。また、研究の本物に触れることができる機会がもっとあれば良いと思う。例えば、研究室訪問など。

⑧その他・メッセージ

(先生が生徒から教わるという新しい学びがあってもいいのではないか)

- 私はこれからの教育・学校の在り方を考えると、先生が生徒たちに教えてもらうのも一つの案としてあると考えています。今の時代、先生よりも生徒たちの方が機械には強いので教わるだけだった生徒にとっても教えるだけだった先生にとっても新しい学びの機会になると考えます。それによって先生たちも子どもへの教え方、学びの深め方を子どもたちから学ぶ

こともあると思います。「子どもたちが教える」という新たな価値が生まれれば、教育のシステムも育つ人材も変わってくるのではないかと感じました。AIが登場して様々な仕事なくなると言われる未来で子どもたちと共に学んで何が子どもに必要なのか現場で肌で感じること、人と言葉で関わっていくことが大切になると思います。

- 前提として「やらなきゃいけない」ではなく、純粋な興味や好奇心を、行動力、原動力に変えられるような、それによる成功も失敗も積めるような環境づくりが大切であること。また、そのために現場に求められることは決まってはいなくて現場によって異なること。これを明文化しておくだけでも、具体的な未来の学校のイメージがつかみやすくなるのではないのでしょうか。

⑧その他・メッセージ

(常に先のために今を犠牲にするという日本の教育への疑問)

- 私は希望した中学校に入学するために小学生で勉強し、希望する高校に進学するために中学校で勉強し、希望大学に入るために高校で勉強し、就職のために大学で学ぶという常に先のために今を犠牲にするという日本の教育方式の形を壊すことにこそ子供一人ひとりに合った教育ができると考えている。決してその道しか無いわけではないが、「大学に入って自分が生活できるぐらいの収入を得ることができる安定した職につくべきだ」と親から言われれば、いくら学歴は関係ない、一人ひとりの個性が大切だと国が主張しても国民の考えは変わらない。また、この考え方が今の子供世代に浸透していけば私達が大人になり子供を育て、その子の将来についても自分たちが言われたことと同じことを言うてしまう可能性が十分に高いのである。

(パッケージができてからがスタート地点)

- 一学生として願います。今こうして私達の学びの環境を整えるために内閣府の方々初め、全国の教師の方々が必死に取り組んでいるとはじめに書いてありましたが、必死になるだけではなく、今考えていることが実現された先の未来に思いを馳せながら完成させてほしいです。この政策パッケージ

も、作って終わりではないと思います。寧ろスタート地点。何かを変えようとアクションを起こして気づくことのほうが、今想像しうることより遥かに多いと思います。その気づきをまた振り返り、アップデートして行く。その循環を生み出すことに最高の価値を意味付けしてほしい。

3. 主な御意見

テーマ別・年代混合

全体

社会や現場への浸透について

- 全体を通して素晴らしい提言だと思った。しかし、文科省も何度も素晴らしい提言をしておられるのに、現場に行くと全く違う、もっと現場が硬直化したものになっているということが多々ある。最初は素晴らしいはずのプロジェクトや改革がなぜ現場に行くとさらなる硬直化、管理体制を促すものになってしまうのか。そこに留意して進めて欲しい。
- 適切な実施のために、教師のマインドセットを変えることと、民間の力を活用するのが大切だと思う。全体像については賛成・共感するところも多いが、実際の実施には現場が対応することになるため、いかに現場が動ける形の政策になるかが鍵になると思う。教師が体験したことがない時代を子どもたちは生きているので、柔軟な考え方をを持った教師が増えるといいと思う。教育を学校だけのものにせず、様々な人が担うことで魅力のある日本独自の教育になっていくと思う。
- 政策パッケージ推進に向けては、コンテキストを社会全体に浸透させる必要があると考える。これまでの教育を受けてきた世代の人たちにとっては、STEAM教育や、TeachingからCoachingなどの新たな教育手法や考え方に対する拒絶反応的なものが出てしまうのかなと考えるし、そういった世代の方々に理解してもらえないと、このパッケージはなかなか進んでいかないのかなと考える。探究的な学びがいくら素晴らしいものであったとしても、それに取り組むことが将来につながるというビジョンが見えなければ、探究を深める段階に行く前に、やはり受験勉強に向かうということになると考えるので、STEAMや、学校外における学びを評価する手法、将来的なウェルビーイングにつながる可能性を浸透させる必要があると考える。
- 予測が難しい社会の到来に備え、今回の施策として取り組む意義は賛成する。新学習指導要領もその社会に対応すべき資質能力を養うことになっているが、高校で言うと、教科書も大きく変化しない、大学入試も大きく変わらない、1クラスの基本となる人数も変化がない、このような状況で教員に新しい学びに挑戦しろといっても、なかなか意識を変えるのは難しい。教育を取り巻く環境を変えることに力を入れて欲しい。

地域格差について

- 実現すれば素晴らしいと思う。一方、本政策の実現において、地方との格差が生じてしまうのではないかと懸念がある。
- 教育に関しては自治体ごとに地域格差が生じかねないので、こうした先進的教育が全土に行き渡るように対策が必要であると感じた。
- 現在転勤先の地方に住んでいるが、子供が興味関心を示す先の学びの場がない。だが、昨今のオンライン化が進み、多くの事がオンラインで解決できるようになってきた。現地でという体験はオンラインでは得られにくいですが、それは現在都市部も同様かと思うので、地方に住んでいる子供でも十分に都市部の環境に近づける事が可能になってきている。しかし、そこにあっても気付いて利用しない事には、差は開いたままである。アナウンスする力・受ける力をもっと工夫した方が良い。

【0.政策パッケージの位置付け】

- 「子ども主体」「公正や多様性・個人の尊厳」「well-being」の価値を中核にしている点に賛同する。その理念と今まであまり公的な支援を受けにくかった「ギフトド」をはじめ、多様な子どもへの支援を実現するため、人材確保を含めた十分な予算措置を要望したい。
- 今回のCSTIの提案は、子どもたちを中心に据えて教育のあるべき姿をいろんな視点で考える素晴らしい内容だと思う。ただし、スピード感が遅いと感じる。できるところからどんどん取り入れていくと共に、全体の動きを加速していただきたい。学校や教員の意識を変えるのと、世間の理解を得るのには時間がかかるという面はあると思うが、早く取り組んでいくことが必要だと感じる。
- 脱却、転換、進化、アジャイルに、発展。「問題解決」ではなく、「変革」を重要視していることが非常に伝わってくる。問題は、学校現場の意識とのギャップだと思う。しかし、余裕がないから現場は今後も変化を避ける、「継続性」を維持する構造力学が働く。早急に教職員の数を増やすことを求めるが、まずは知事に理解を求める研修が必要だと思う。国から管理職に「変革」を強く求めていただきたい。

【1.社会構造と子供たちを取り巻く環境の変化全体について】

- この変化自体をよりわかりやすい形で、先生方や保護者の方に伝えていく必要があるのではないか。
社会の創り手を育てるには、子ども時代から学校や社会に創り手として関わる必要があるが、その背景を理解していないと、なぜ各種政策の変化が必要かわからず、形骸化してしまう。
- 今回の提言は困っている子の保護者や周りの大人にとって、非常に魅力的でよくなるイメージが付きやすいと思うが、この図のどれにも該当しない、今困っていないと思われる子の保護者には変化への不安が大きくなるだけかもしれない。
今困っていないです、という多数派に対して、「このように教育を変えることがあなたにとってもプラスです」、と伝えて納得してもらうことが教育予算を多くつけていくことに、不満を発生させにくくなると思う。
- この指針は進んでいく未来に期待を持てるもので大変良いと感じた。
しかし、新しい教育方針で育った人との世代間による価値観や、技能に壁が生まれ、業務上の滞りや、精神的な疎外感を互いの世代に生みかねないのではないか。子供の教育に限らず、大人や、ICTへ興味を持っている人が気楽に学べるようにし、社会全体のICTレベルを上げていくことにも力を入れていただけると良いのではないか。
- ICT技術を活用し、教育現場をデジタル化することのメリットはよく分かるが、一方で、そのコストはどう賄うのか。
生徒用タブレット機材の更新の都度、巨額の税金がかかるわけだが、その財政負担に国や自治体は耐えられるのだろうか。
- GIGAスクール構想は大きく進めていただきたいが、児童・生徒の学習環境を整えるのと同時に教員の意識変化やデジタルに精通した教員の意見をくみ取れる職場環境の構築、ガイドラインの設定などによる教員のリテラシー教育が必須である。

【2.教育・人材育成システムの転換の方向性】

- 基本的な理念・方向性には賛同する。特に教育の目標としてウェルビーイングを掲げることは非常に重要だと思う。

一方、「これまで」と「今、これから」が二項対立となり、全ての生徒・学校が右側に移行すると捉えられることに懸念を感じる。特に資料内で何度か「×」がつけられている点(同調圧力、正解主義、大人が図りやすい力を評価)は、今後重要性が低下するにしても、必ずしも不要になるものではないと考えられる。また、不要とすることによって、「変わりたくない」「変わらない」大人や生徒が疎外感を持つのではないか。左から右へのパラダイムシフトではなく、右側が左側を含んで大きくなる多様化がめざすべき方向だと考える。
 - 現在私は保育園で勤務しているが一斉保育から主体的な保育へ変わりつつある。しかし、自分自身が一斉的な教育を受けて育った中で色々研修を受けても「主体的な学び」は難しいと感じる。自分が経験した事ないことを伝える難しさを感じる。そのフォローアップを国が手助けしてくれると助かると思う。
 - これからの時代に求められる教育の方向性について理解できる。しかし、学校現場の実態としてGIGAスクールへの対応やコロナ対応などに追われており、働き方改革がほとんど停滞している。ICTの活用を進め業務の効率化も進めなくてはならないが、それを具体化するだけの時間と余裕がまったくない。ここが一番の問題点であり、もっと人と金をつけなくては、学校は疲弊する一方である。その点の視点が方向性にまったく書かれていない。教職員定数の抜本的見直しによる教職員の大幅な増員、時間外勤務の支給、新しい教育のための施設設備の大幅な刷新が必要である。
 - 教育・人材育成システムの転換の方向性(スライド20)に示された内容には、基本的に賛同する。ここに掲げられた理想像と現実(教育の現場)との間のギャップ、乖離は極めて大きい。現場には、文化的、構造的な諸要因に根差して固定化されている課題も多い。各種政策を総動員して政策目標を実現するためには、日本の社会全体の意識改革、大きな行動変容を促すことが必須である。教育、人材育成の価値、重要性に鑑み、すべてのステークホルダーが当
- 事者意識を持ち、社会全体がリソースを提供し、変革の着実な実行において協力する体制を構築するためにも、社会的コンセンサスづくり、各ステークホルダーとの対話を丁寧に、かつ粘り強く、実施していただきたい。
- 人材育成の視点に、グローバルの視点を取り入れるべきと考える。新しい価値観を創出し、イノベーティブな活動を豊かにするためには、多様な考え、価値観に触れる必要がある。日本の教育は、全国どこでも良質なコンテンツを享受することができる。しかし、それは一方で、価値観の多様性が保障されにくく、イノベーティブな発想を生み出すことは難しい。
 - 子供を海外でBの学校に通わせた際、育成する人材像の要素として「risk-takers」を挙げていることに衝撃を受けた。日本では、何事もリスクがないことが最善という雰囲気があるが、それではグローバル化しかつ不確実性の大きい社会において、リスクを取る人たちの後塵を拝するのは必然であると感じる。この点、日本でも必要なリスクを取れるような人材を育成することを教育の方向性として示すべきではないか。人とは異なることに挑戦する人を育成するために不可欠だと思う。
 - 資料p10の図は児童生徒の多様性を端的に示しており、「個別最適な学び」への移行の必要性の裏付けとしてとても説得力のある資料だと思う。ただし、不登校傾向であり、自宅に蔵書が少ない、生活言語が日本語でないなどは1人の児童生徒が重複して抱える困難であるケースも少なくない。図が示す以上に、何の特性もない中間的な児童生徒の割合は多いのではないのでしょうか。Giftedによる国際的な競争力をもつ人材育成や困難を抱えた児童生徒へのケアの必要性に注力していくことで、これまでの日本の教育における長所である国際的には平均して勤勉で高い学力の国民を構成する中間層の学力低下を懸念する。その背景には、個別最適な学びや協働的な学びへの対応力をもった平均的の大多数の教員の資質向上、研鑽機会や時間の確保、教職離れへの対応が課題としてあるはず。必ずしも教員や学校が担わなくても良い業務の外部化やスクラップ&ビルドの推進なども同時に進めていかないと、折角の提案を現場が対応しきれないことになりかねない。

【3.<政策1>子供の特性を重視した学びの「時間」と「空間」の多様化】

- 揃えるから伸ばすの方針の転換、教員の授業観を変えることは、非常に大切。
 ただ、現在の学校現場は、新しい授業観のモデルが分からず、一斉学習の授業スタイルから脱却できない現状にあると思う。総合的な学習の時間などをモデルに、探究の学びの全国の実践例を共有化できればと思う。
 多様化の時代だからと個別最適化や協働的な学びを目的化してはいけないと思う。教科の本質に根ざした、資質能力育成のための学びの多様化であり、子供主体な学びであることを胸に実践していきたいと考える。
- 「そろえる」教育から「伸ばす」教育へ転換や、子供一人ひとりの多様な幸せ(well-being)の実現などは、今後の教育の方向性として大賛成である。ただ、方向性は賛成だが、子どもの個性が伸ばされ、多様な幸せが実現すれば、全国学力学習状況調査の教科の平均点や、質問紙の肯定的回答のポイントが向上する、あるいは、有名大学や高校への進学率が上昇するのか。「中間まとめ」でも評価軸の変更が謳われているが、国が本気で子どもたちの個性を伸ばし多様な幸せを願うのであれば、学力の一つの側面しか示さない、しかも全体的な傾向しか示さない、全国学力学習状況調査の毎年の悉皆調査を抽出に変更または、数年に一度に切り替えると共に、国として個人のスタディログの分析を進め、それを広く公開していただくこともご検討いただきたい。発達のどの段階で、どのような教育や学びを積み、個性が伸ばされ、幸せの実現につながったかが系統化されれば、今後の学校教育が個人を重視したものに变化していくと思う。
- 多様な人材が学校教育に関わるということは、デジタルにおける情報の共有が必須になる。個人情報漏洩への不安ばかりが声高に叫ばれ、ICT化が進まない現場では、連携どころか業務が増えるばかりである。学校のデジタル環境の充実もぜひ進めてほしい。
- 子どもたち各々の個性が尊重されて、学びのいろいろな選択肢が増えるといいなと思う。その役割を学校や先生に押し付けるのではなく、保護者や市民、地域社会との協働、協創がもとと活性化するような仕組み作りに期待する。
- 現在の我が国の公教育は、全体的な能力向上と協調性や組織への従順性を重視する全体的なワンパターン・プログラムのプログラムであるため、その反面ひとりひとりの個性や適性に合った個人別教育プログラムの開発、実施において、グローバル・スタンダードから見て、致命的な程の周回遅れとなっている。
- 23ページにある資質・能力重視の教育課程への転換は概念として多くの人が賛同すると思うが、それを実行するための最も大きなハードルが国立大学の入試だと考える。「個別最適化学び」としながら、その出口では5教科7科目の総合力による指標を「教科ごと」に「均質的」に「一斉」に行う方式で測っている。結果として学習指導要領上はカリキュラムの弾力性があるにも関わらず、多くの学校が似たカリキュラム体系を取らざるをえない状況。総合型選抜だけでなく、一般選抜においても5教科一律で求める現在の状況の改善について踏み込んでいただけると、カリキュラムでも多様性に踏み込みやすくなると思う。
- 高校入試制度そのものが、格差社会を過度に生み出し、また同調圧力となっていると感じる。とりわけ中学校は形式的な学力にとらわれ、保護者や塾は過度に点数(学歴)にこだわり、その圧力を受けて教師は出口指導(詰め込み・知識の切り売り等)に偏りがちとなっているのが現状であり、結果、本来あるべき探究的かつ主体的な学びにならず、生徒は見える学力で区別されることによる自己肯定感(自尊感情)を低下させられている。これが生涯にわたってメタ認知され、それが負の連鎖となっているのではないか。

- 個別最適化された学習機会の提供は、一見どの子どもに対しても最適ように見える。しかしながら、個人の学びが高まるだけでは、他者との競争になってしまう恐れもあり、他者と学び合う学習の充実も必要。個別化を強調されすぎないことを願う。
- 「学校」という枠の中だけで完結することは不可能であると日々感じており、学びの「時間」と「空間」の多様化の必要性と実現は大賛成であるが、社会全体として認識されなければ実現できない。その際「学校」以外の場での活動に関する責任の所在や、子どもたちの学びを誰がコーディネートするのか等を考えておく必要があると考える。
また、学年制の限界を感じていますが、ばらつきのある生徒へ対応したり、より主体的な学びを展開するためには、現在の教員定数で実施していくことは不可能なため、法改正も必要だと考える。
- 「皆と同じことができること」や「大人が測りやすい力を評価」をする構造やそれらを重視する価値観が重視される傾向は、地方社会にはまだまだ根強くあり、就職をする際に社会から求められる。現実的には、多様な能力や価値観を受容できるような社会にはなっていない点に課題を抱えている。
- 学校という場所が、決まった時間に決まった場所でみんなで同じ先生の話を静かに聞く場所ではなく、他人と協力して何かを行う、他人と一緒に楽しく遊ぶという意味で子供たちが集う場所であり、今より数段と自由度が高い物であれば良いと感じた。
- 興味関心を持つ教科、理解度の違い、などの子供の特性を重視した教育を進めることは、多様性やアイデンティティに基づいた人格形成という意味で大変価値あることであると思うが、一方で子供の将来を若いうちから限定する可能性があるのではないかと感じた。
子供の段階から興味関心・理解度の特性に最適化された教育を展開するのではなく、自分とは異なる分野に興味がある人、自分とは違う初期知識をもつ人など、様々な人との様々な交流を経て新たな夢を持つことができる機会もあると思うし、個別最適化された授業形態の推進によって、もともと興味のない分野や異なるバックグラウンドをもつ同年代の集団と出会う機会が失われるのは勿体ないと思った。
また、全員の子供が自分の特性を理解するのは、簡単なことではないと感じた。
- 「一人ひとりの多様な幸せ(well being)」を大前提としていること、心から賛同。最近の教育政策では「主体的・対話的で深い学び」、GIGAスクール構想とうちでているが、公立小中学校の現場になかなかこの理念が伝わらない現状のよう。学びの主体が子どもにうつらなく、一斉授業、一律の宿題、「主体性」の評価もペーパーテストで行う。(そもそも子どもの主体性は多様で、内面的な変化をどれほどキャッチできるのか、いま「主体的」でないように見えても、何年後かに花開くこともあるのではないか。そう考えると、短期的に「主体性」の評価評定を決めてしまっは、子どものやる気や可能性にふたをしてしまうことになる。)また、中学校では高校入試があるため、内申を気にした学習が中心になる。先生やまわりの子の顔をうかがい、「正しい」言動をしようとする。まさに同調性・画一性を推進するもの。これでは学びが嫌いになったり、学校へ行きたくなくなる子どもも増えるのは当然。

(不登校関係)

- 多様な学び、オルタナティブな学びを取り込んで、子どもそれぞれのニーズに合った教育をしていくというならば、教育基本法に書かれている「普通教育」が学校教育のみではないこと、つまり教育が学校ありきではないことを、明示する必要があるのではないか。

多様な学びと言っても、「学校に準ずる」とされるものだけが認められるのであれば、一定の基準に子どもを添わずというこれまでの発想と変わらず、子ども中心の行政にはならないと感じる。「学びたいことを、学びたい時に、学びたいように」という、子どもの権利が守られるには、という視点に立って、「普通教育」の制度設計をしてほしいと思う。

オルタナティブ教育においては、教育の質の確保が論点になるが、基準にあっていることが質を担保しているとは思わない。そうであれば、きちんと基準の決められた学校教育は、だれにとっても質の高い教育になるはずだが、実際は学ぶ権利が保障されていない子どもが大勢いる。であるなら、基準にあっているかではなく、子どもの状態を見て判断するのがよいのではないか。

子どもが健全に育ち、権利が保障され、まさに、well-beingが保たれているならば、どんな内容でも、方法でも、質は保たれていると言えると思う実現のためには、お金をしっかり投入することが不可欠。特にオルタナティブや学校外プログラムは自己責任でとらないように、「公」で保障できる仕組みにしてほしい。そうでないと、お金がある人だけの特権教育になってしまう。

- 不登校の保護者であるが、不登校の子供が学べる場所に予算をつけてほしい。授業のレベルがあわないことや既に知っていることの反復学習が苦痛そうだった。その後、自費(公費では断られた)で田中ビネーとウィスク検査をし、高IQと凸凹な指標差(60)が確認できたが、LD(書き障害)も持ち合わせているギフトティッドであると思う。息子の意思として、今後も学校に戻る可能性は皆無。息子の将来の夢は『科学者』。実験が好きで、元素にも興味がある。学ぶことが嫌いな訳ではないが、通える範囲に適したフリースクールは存在しないし、その費用も家計的に想定外である。不登校特例校も、通える場所にはない。すでに、学校に戻らない(戻れない)ホームスクーリングの子供にも、家庭の出費なく学べる場を作っていただきたい。
- 学校に行くのが当たり前という社会的な概念がひどく不登校の子や、その家族を精神的に追い込んでいる。不登校ということばすら、何か否定的な印象を持つ。教育委員会では、すでに学校に必ず行かなくても良い旨の通達を出しているにも関わらず、その通達は何ら効力を持っていない。結局のところ、学校に行かなくなった子を持つ家庭、また本人が、精神的にも立ち直りまた社会の中に戻るためには、本人の価値観の変革が必要になる。社会の価値観が変わるのを待ってられないからである。良いカウンセラーや、支援級の先生などに巡り会えたらまだマシであるが、ほとんどの家庭は自分達でもがき、糸口を探し、時間と労力をすり減らす。また、多様性、その子らしく…を受け入れる施設や学校もまだまだ少なく、そこから明るい未来の展望がひらけているかという、果たしてどうか。

【3. <政策2>探究・STEAM教育を社会全体で支えるエコシステムの確立】

学校や教員だけで探究・STEAM教育を進める難しさー企業、自治体、大学等の支援を

- 「総合的な探究の時間」と「STEAM教育」の親和性が高いことは理解するが、一方で、STEAM教育があたかも「新しい教育手法」であるかのように理解され、教育現場では「探究に取り組むに当たって、どのようにすればSTEAM教育になるのか」という疑問が噴出している。「STEAM教育が何か」ということについて、各人の考えに委ねるだけでなく、現場で指導に当たる教員が納得できる説明や実感を伴う演習が必須であり、国においては、都道府県教育委員会との連携を強化し、丁寧な説明をお願いしたい。
- 探究的な学習を学年全体、学校全体に広げていくことには大変な難しさがある。新しい教育手法を教育現場に浸透させるためには、まず教職員の意識を変えていくこと、教職員がそうした知見に容易にアクセスでき学ぶことができる環境を整備することが必要だと考える。そういう点で27ページ9に示されているプラットフォームの構築は大変に有意義かつ必要なものであると考える。そのプラットフォームをさらに教育全体に範囲を広げて実施していったらいいか。
- 探究やSTEAM教育はマニュアルがない。経験者は色々な工夫で授業展開ができるが、教員の大多数は苦労すると思う。政府、自治体、企業の積極的な授業支援が必要である。
- STEAMにおける教科横断は、いわば手段であり、本質はマインドセットにあると考える。ワクワクをベースに社会課題等の問いを立て、様々な知識を活用して試行錯誤を繰り返し、アウトプットを生み出す。私の勤務校でも今年度からSTEAMコースを新設し、意欲的なカリキュラムに取り組んでいるが、「型に捉われない」「まずやってみる」「失敗を糧にする」といったマインドセットに重点を置くことで教員の意識も変わり、「みんな違って、みんないい」という、子供の特性を重視した学びの足掛かりが出来てきている。現在の文脈であるとSSH等、理系に傾きがちであったり、探究と並列になることで埋もれてしまう。学校に新たなマインドセットを入れていく際にSTEAMの考えは有効だと考えるため、STEAMのマインドセットについても触れてはどうか。
- 学校単体ではなく、エコシステムとして考えられている点に大変共感する。私自身、高校での探究等のコーディネーターを経験したのち、教員としても働いたが、教員だけで探究を支えるのは難しいと痛感した。探究やSTEAM教育を進めていくなら、コーディネートする人材は必要不可欠であると思う。現在、現場の必要性から広がりつつあるが、雇用の不安定さ等から、なかなか長く続けられない仕事になっている。エコシステムとして、持続可能な形を検討いただきたい。また、そうした連携を支援する教育委員会の役割も重要であると思う。教育委員会へのコーディネート人材の配置も必要かもしれない。教育委員会の機能を強化すると言っても、教員出身の方と教育が専門ではない行政出身の方だけでは、取り組みに限界があるようにも感じる。
- 学校教育は根幹として極めて重要であるものの、政策1にある「個々の特性に応じた多様な学び」の機会を提供するためには、社会全体で、VUCA時代を生き抜くための力、生涯の学びを支える非認知能力、探求心、STEAM教育を支えるエコシステムを確立するという政策2の方向性に、大いに賛同する。探究・STEAM教育を社会全体で支えるとき、リソースが集中する大都市圏が一方向的に有利となり、多様な学びにおいて新たな格差を増大させることがないよう、政策・環境を整備すべき。オンライン、企業・産業界の力も積極的に活用するとともに、各地域の課題にも根差した探求教育の機会が必要となる。

【3. <政策3>文理分断からの脱却・理数系の学びに関するジェンダーギャップの解消】

ジェンダーの問題は、社会全体の意識変革が必要

- ジェンダーギャップ解消に向けては、全国民の意識改革しかないと感じる。
- 資料の30ページに、「根拠のないバイアスが保護者・学校・社会からかかり」とあるが、おっしゃる通り、問題の本質だと思う。
いくら教育分野ががんばっても、社会(会社、組織)が古い価値観ではいけないと思う。この問題を本質的に解決するには、行政の部門の垣根を超えて、すべての分野でこの価値観を浸透させる必要があると考える。
- 私は女性だが、高専の機械工学科から大学工学部に進み、技術職に就いた。
学生時代は極端に女性が少ない環境であったが、それでも、社会に出て活躍したいと思いながら努力をした。
しかし、実際、社会に出ようとしても、就職の時点で男女間の差を感じ、就職してからも「ここは女性がくるところではないな」と思い知らされた。会社単体で男女平等の教育を受けたとしても、取引先や、関連会社や、研修先など、様々な人と出会い、多くの差別を受けた。場所によっては、男性用トイレはあるのに女性用トイレはなく、膀胱炎になったこともある。
理数系を学ぶのに男女差が生まれるのは、結局就職の先に男女差があるからであり、まずこれが変わらなければ私のように挫折する人が増えるだけだと思う。
- 伝統的な性別役割分業として、女子の理系が不向きという固定観念を払拭しようという方向に、共感する。社会的慣習としてのジェンダーギャップの解消を推進する起爆剤的な国の施策や判断を期待している。
- ジェンダー平等を進めることは、必要だと思う。そのためには、研究職の重視(大学の研究費の大幅な増加、非正規ではなく正採用による身分の安定)や社会全体の変革(短期的な人材育成を学校に求めるのではなく、就職後に企業の中で十分な研究が出来るような余裕を作ることも)も必要。
- 「透明の箱」=思い込まれる、のが女子は理数が苦手、である。これは日本だけではないが、女子は家庭を守る、学ばなくて良い、という過去のマイナス遺産が続いていることの帰結である。時間をかけて解消するしかないが、「なぜそんなことになったか」をここでも仮説を立てて、伝える必要がある。「間違っても良い」ことを伝えるためにも、これまでの日本の教育方針が間違っていたことをきちんと伝える必要がある。そして、海外で女子もきちんと日本で言う理系に進むことで国が変わっていった海外事例を伝える必要がある。
- 娘(高1)も理系強化が苦手である。興味がないのではなく、理解できない⇒苦手となっているようである。本来、理系教科で習うことはもっとワクワクするもの、そして社会に役立つものだと思う。私(父)は子どものころ、星や宇宙、アインシュタインやスティーブン・ホーキングの世界にワクワクして理系を目指した。理系教科の学びからもっとワクワクを感じたり、社会を変える可能性を感じられると良いと思う。

- 個別最適化された授業形態の推進によって、異なるバックグラウンドをもつ同年代の集団と出会う機会が失われないように配慮すべき。
- 授業は個別化・デジタル化されても、学校に集まるリアルな学びの重要性は踏まえる必要。
- 文理の学びのジェンダーギャップ解消に国がどこまで介入するのかは慎重な配慮が必要。
- 探究・STEAMや多様な学びを進めることで、リソースが集中する都市部が一方向的に有利になるような新たな地域間格差を増大しないようにすべき。
- 現在の教育の仕組みが合っていて、今困っていない子供たちの保護者にとっては、教育システムの変化に対する不安が大きいのではないか。
- 特異な才能のある子供や困難を抱える子供へのケアに注力することで、これまでの日本の教育の長所であった国際的に勤勉で平均的に学力の高い多数の中間層の学力が低下するのではないか。
- 教育・人材育成システムの転換の方向性について、「これまで」➡「これから」の部分は、「これから」にパラダイムシフトではなく、グラデーションがあるべきではないか。
- 「5年程度」はスピード感が遅いのではないか。できるところからどんどん進めるアジャイルな方向性も出すべき。
- STEAMや探究など、新しい教育に対しては教員の負担が大きくなるだけではないか。

アンケートへのご協力ありがとうございました

この度は、沢山のご意見をお寄せいただき、誠にありがとうございました。

今回のアンケートでは、本資料でご紹介できたのはその一部です。

いただいたご意見は、WG委員や事務局において、一つずつ拝見し、

今後の政策パッケージのとりまとめに向けて活かしてまいります。

特に、10代の皆さん、今回ご意見をお寄せいただいたのは高校生が多かったと思いますが、

ご自身の体験から普段感じられている学校や教育に対する思い、

コロナで休校やオンライン授業になり、改めて感じた学校や仲間と一緒に学ぶことの意義、

進路選択の迷いや難しさ、

少し未来に思いを馳せながら社会がどうあるべきかなど、

沢山の想いやお考えをお寄せいただきました。

大人が思いつかないようなアイデアや想いにあふれており、これを読んだ多くの人々が皆さんの想いに触れ、

様々な場面で考えを巡らせることにつながります。

皆さんの声一つ一つが、社会を変えていく原動力になることでしょう。

数々の貴重なご意見、誠にありがとうございました。